

## もの言う牧師のエッセー 第123話

## ソチ五輪

### ②「士」

日本に唯一の金メダルをもたらした日本中を魅了した羽生結弦選手には、男子フィギュアスケート初の金メダルのほかにも色々おまけがついた。ショートプログラムで世界歴代最高の100点超え(101.45点)を記録したことや、同種目で10代の金メダリストとしては66年ぶりの快挙、さらには平成生まれの日本人初の金メダルなどである。そんな彼は演技前に胸の前で十字を切るようなジェスチャーしているので「カトリック?」と思いきや、そうではなく「士」の字を書いておまじないをしているという。

士とは、もともと中国伝来の言葉であるが、「もののふ/サムライ」や「兵/つわもの」、そして「尊敬に値する立派な人物」という意味がある。実は彼の試合後の表情は硬かった。なぜなら彼は仙台出身で多くの被災者らと苦悩を分かち合っており、今も仮設住宅に暮らす人々のことが頭をよぎり、喜びを表すことに戸惑いを覚えたのだ。日本オリンピック委員会(JOC)から支給される報奨金300万円も震災復興や、自分を育ててくれた「アイスリンク仙台」などに寄付するという。なるほど、単なるスケートのチャンプというのみならず、彼こそは人の痛みを理解し、困っている人に手を差し伸べる「士」そのものと言えよう。

さて、「士」という字は見ての通り“地上に十字架”と書く。実は6世紀に仏教伝来と同時に多数の漢字も日本に持ち込まれたが、それらは2世紀頃の大乗仏教成立前後から種々の宗教の混交と同時に、聖書の影響を強く受けた結果、多くの「十」が漢字の形成に寄与することとなった。“十字架に口”と書いて願いが「叶」うや、“天と地を十字架でつなぐ神”を示す「王」など枚挙に暇がない。つまり「士」とはキリストを表すと言っても過言ではあるまい。

**「主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された。」**

**士師記 2章 16節 : 共同訳**

と3000年以上前に、周り中が敵だらけのイスラエルを、神が弱きを助ける“裁きつかさ”を送って救ったことが記された聖書の言葉は正に読んで字の如くである。そもそも“イスラエル”という意味自体が「神の戦士」を意味し、「士」そのものと言って良い。が、現在のイスラエルを見て分かるように、人のエゴや政治のごり押しは争いを生むだけである。キリストの様に、人のために戦う優しい「士」でありたいものである。

2014-2-25

